

## 絵本と音楽

### — 子ども図書室での学生による発表を通して —

Picture Books and Music  
— Case Studies by Students at Children's Libraries —

小島 千か\*

KOJIMA Chika

**要約:** 絵本に音楽を付ける活動を「音楽理論及び演習 II」の授業で行い、出来た作品を有志の学生が子ども図書室において子ども達の前で発表した。その発表作品の内容から、絵本に音楽を付ける活動は、レベルの違いはあるものの、小学校音楽科の音楽づくりでも行われるイメージを音にする活動と同様の内容であり、今後も続ける必要性を感じた。今回の発表作品は、「テーマとなる一つのメロディーを作り、そのメロディーを絵本の登場物のイメージに合わせて変化させる」、「絵本の登場物や場面をイメージさせるような音楽や音を演奏する」のどちらか又は両方を用いて音楽が付けられていることが明らかになった。そこでこの方法で絵本に音楽を付ける活動をするにあたって、授業における今後の課題を示した。更に、音・形・色・動きの関わりとイメージについての考察も今後の課題となった。

**キーワード:** 絵本、音楽付け、イメージ、テーマメロディー、効果音

## I はじめに

「音楽理論及び演習 II」では、幼稚園や小学校での音楽教育における実践的な能力を身につけるために、特にコードネームの付された楽譜を見ての弾き歌いをメインに授業を進めている。この授業は「初等音楽科教育学」「音楽理論及び演習 I」の2科目を順に履修し単位を修得していないと履修できないものであるが、レベルが高度になるというよりも、これまで学んできた内容を様々な形で実践につなげることを目標としている。毎年、履修学生の授業に対する要望もふまえて授業を進めているが、昨年度、ある学生が「絵本に音楽を付けてみたい」と言って、雑誌（音楽広場, 1996, 2月号）のとじこみを見せてくれた。そこには、「絵本をうたう」として、絵本に歌やBGMを付けるアイデアが示されていた。そしてどのような絵本でも音楽を付ければよいというものではなく、絵本選びが大事であり、特に繰り返しがあるような絵本がよいことが分かり、筆者が絵本を選び学生にグループで音楽付けをさせた。そして、その中から有志の学生が子ども図書室での発表を行った。発表作品の内容とその実践について以下に示していきたい。

## II 発表作品の内容とその実践 その1

平成17年度前期「音楽理論及び演習 II」の授業の一環として、平成17年7月16日（土）14時より山梨大学附属図書館子ども図書室で「音楽にあわせて絵本をよもう」という図書室のイベントとして行った。幼児教育の学生がチラシを作り、近隣の幼稚園や小学校に出向いての宣伝等を行ってくれたお蔭で、当日は大勢の子どもや保護者の方がいらしてくれた。

---

\*音楽教育講座

## 1 『がたん ごとん がたん ごとん』

学生が選んだあかちゃん絵本である。ギター伴奏による歌に、タンブリン、鈴、カスタネットが徐々に加わって、オープニングに相応しいにぎやかな演奏となった。

「がたん ごとん がたん ごとん」と黒い貨物列車が走ってきて、隣の頁には哺乳瓶が「のせてくださいー」と待っている場面から始まる。次の頁をめくると、貨物列車の最後尾に哺乳瓶が乗っていて「がたん ごとん がたん ごとん」と走っている絵になる。次の頁では、「がたん ごとん がたん ごとん」と貨物列車の先頭の部分だけが見えていて、隣の頁にはコップとスプーンが「のせてくださいー」と待っている。頁をめくると後ろから2番目の貨車にコップとスプーンが乗って「がたん ごとん がたん ごとん」と走っている絵になる。このように徐々にお客さんが乗ってくる（この後、林檎とバナナ、猫と鼠が乗ってくる）のであるが、この部分を「がたん ごとん」ではなく「がったん ごとん」としてテーマメロディーを作り（譜例1）、毎回ギターと歌で演奏し、お客さんが乗ってくる度に打楽器が一つずつ加わっていった。その後「しゅうてんでーす みんな おりてくださいー」という場面ではメロディーが変わり（譜例2）、最後徐々にテンポをゆるめて「さようなら」（譜例3）を弾いて終わった。

譜例 1

譜例 2

譜例 3

## 2 『なんでしょ なんでしょ』

テーマメロディーとアイデアを筆者が提供し、学生が演奏表現に関して様々に工夫したものである。発表に際しては、音楽科の学生が二人で行う予定であったが、当日一人が体調不良で欠席のため、もう一人の学生のピアノ弾き歌いに、急遽、筆者が絵本を読んで歌うことになった。

「ペンギンがすなはまで えをかきました なんでしょ なんでしょ」とペンギンが砂浜で棒切れを使って何か動物の輪郭を途中まで描いている絵から始まる。次の頁を開くと巨大な蛸が登場し、びっくりしたペンギンが小さく描かれている。次は、「こんどは たこが えをかきました なんでしょ なんでしょ」といって蛸が同じように何かの動物の輪郭を途中まで描いている見開きがあり、次をめくると巨大な象とその鼻に小さな蛸が吸い付いけられて、蛸が「やめろ やめろ」と言っている絵が登場する。このように見開きで、ある動物が何か動物の輪郭を描いている絵に「なんでしょ なんでしょ」

の語りがついている頁と、次にその答えの動物が見開きいっぱい描かれている頁が繰り返されている。そして、答えの動物の巨大さと、前頁で輪郭を描いていた動物の小ささという対比、それはある時は本来小さな動物が大きく、大きな動物が小さく描かれるということにつながり、ユーモアがある。そこで、「なんでしょ なんでしょ」の語りは決まったメロディー（譜例4）を弾いて歌い、次の答えの頁を開くまでの間にその動物の感じや様子を表す音やその動物をテーマにした歌のメロディーをアレンジして演奏した。どの動物に対しても電子ピアノ（YAMAHA ELECTRONIC PIANO P-60）で音色を変化させ、それぞれの動物らしさを音で表現した。

まず蛸では、G音から1オクターヴ上のA音までの半音階の往復を2回演奏して、蛸のにゆるにゆるした感じを表現した。象であればその足音の感じを低音のC音とG音を交互にゆっくり2回弾き、3回目からC音、A音、G音と《ぞうさん》の出だしの音に変えて表現した。子どもたちは前頁の輪郭を見て、すでに「ぞう」と口々に言っていたが、それでも敢えて筆者は「ほら、足音」と語りかけてみた。すると「やっぱり、ぞうだ」と言う子どもが数人いた。次に「ぞうが のびのびと えをかきました なんでしょ なんでしょ」と歌いながら、象が輪郭を描いている頁を見せていると「あっ、何だ?」「あめだよあめ」「違うよ」「あめじゃない」と様々な声が聞こえてきたのだが、Cメジャーコードのゆっくりとしたビートがオルガンの音色で聞こえてきたら、「かめだ」「かめ!」と数人の子どもが言った。「かえる!」という声も聞こえる。頁をめくり三拍子の演奏（譜例5）になると、大勢のワーッと驚きの声があり「ゴリラ」と一人の子どもの声。巨大なゴリラに小さな象が「おおきく かきすぎた」と言って追いかけている絵が登場したのである。次にゴリラが描いている場面では、「なんでしょ なんでしょ」のテーマメロディーを歌っている時点から多くの子どもが「かえる」と言っていた。その後、ピアノは始め《かえるの合唱》の前半部分を付点とシンコペーションを用いて軽快に弾いていて、頁をめくって巨大な蛙が登場したら《かえるの合唱》の後半部分を低音で重い感じに演奏した。「わっ、でけえ〜」という子どもの声。「びっくり」と逃げているゴリラの5倍位の大きさの蛙が「ゲヘ ゲヘ ゲヘ」と舌を出している絵である。次は蛙が描いている場面になると、暫くは何も声が聞こえなかったが、一人の子どもが「おたまじゃくし」と言ったら、多くの子どもが次々に「おたまじゃくし!」と叫んだ。ピアノは《めだかの学校》を最初はかわいらしく高音域で演奏していて、次の頁をめくって巨大なおたまじゃくしが登場した瞬間に音域を下げると共に音量を大きくした。次のおたまじゃくしが絵を描いている場面では、「鼻だ、鼻だ」「何?」「ブタだ、ブタだ」と子どもたちは口々に言った。豚の鼻の輪郭がたくさん描かれている。ピアノは《こぶた たぬき きつね ねこ》を高音でのんびり演奏していて、頁をめくって豚の大群が「ドッ ドッドッ」「ブヒッ ブヒッ ブヒッ」と押し寄せて来る場面では、低音で左手の伴奏型を分散和音にして急速に《こぶた たぬき きつね ねこ》を演奏した（譜例6：こぶたのテーマ）。次の7匹の豚が何かを描いている場面では、「キリン」「かまきり」の声が聞こえた後あたりで、ピアノをウィブラフォーンの音色に変化させてゆっくり演奏した（譜例7：ペンギンのテーマ）。「かみきりむし」「こうもり」と子どもの声が続き、最後に「ペンギン」という声。頁をめくると巨大なペンギンが「ペッタン バッタン」歩いていて小さな豚たちが逃げていく場面になる。ピアノはペンギンのテーマを1オクターヴ下げて弾き、続いて先に出てきたこぶたのテーマを弾いた。次の頁は、広い砂浜の遠くにペンギンが豚を追いかけている様子が描かれている。ピアノはまず、ゆっくりとしたペンギンのテーマを弾いた。筆者はそれに合わせて「ペッタン バッタン」と言い、「何でみんな逃げちゃうの?」と絵本にはない言葉を付け加えた。ピアノは、急速なこぶたのテーマに変わった。「もう夜だから」「怖いから」と答えてくれた子どもがいた。再び、ピアノはペンギンのテーマに変わり、頁をめくると最後の頁で、ペンギンが1人で棒きれを砂浜に置いて、「なにを かこうかな?」と考えている場面になるのでそれを歌って（譜例8）終わった。

譜例 4

ペン ギン が す なは まで え を か き ま し た  
 なん で しよ なん で しよ

譜例 5

こぶたのテーマ

譜例 6

ペンギンのテーマ

譜例 7

譜例 8

な に を か こ う か な

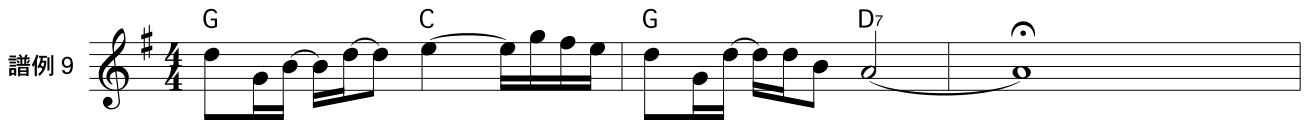
### 3 『ぼくのおじいちゃんのかお』

これは、伊藤義明<sup>1</sup>のギターでのアイデアを学生がアレンジしてピアノで実践したものである。この絵本は、おじいちゃんの様々な白黒顔写真とその表情の説明でできている。表情の説明を読み始める時に毎回演奏し（譜例 9）、頁をめくるときは D7 コードを分散和音にしてなめらかに演奏することによって間を調節した。この演奏が止めどなく繰り返され、BGM 的なものである。説明の内容によって弾き方や音高に変化を持たせていた。

「ぼくのおじいちゃんのかお。」と一面に書かれていて、隣の頁に口を真一文字にぎゅっと結んだおじいちゃんの顔写真が載っている所から始まる。頁をめくると、「おじいちゃんをよくわらう。」と

<sup>1</sup>愛知県にある子どもの本専門店〈花のき村〉を経営するとともに、ギターの弾き歌いをしながら絵本の読み聞かせをするという独創的な公演を全国で展開しており、平成 17 年 1 月 15 日には、山梨大学附属幼稚園において「ギターで絵本を歌う、絵本を楽しむ」という公演を行った。

示され、隣頁に口を広げて笑っている写真が登場する。子ども達は真剣に見入っており、思ったことを口々に発した。「よく笑わない、おこりんぼう」と自分のおじいちゃんの事とも取れるものや「だれのおじいちゃん? この中いる?」という微笑ましい発言もあった。「あんまりわらうと、ないているみたいだ。」では、口を縦に大きく広げてあくびをしているような表情の写真なのであるが、「泣いていない、怒っている」と言った。「おじいちゃんのめは、ちいさい。」の目を細めて微笑んでいる写真の頁では、「小さくないまるで怪獣の目みたい」と言う子どもがいて、周りの笑いを誘っていた。次頁の「でも、おおきくなる時もある」では、鼻の下の方に眼鏡が下がった状態で微笑んでいるおじいちゃんの顔写真であり、子ども達は笑って面白がっていた。



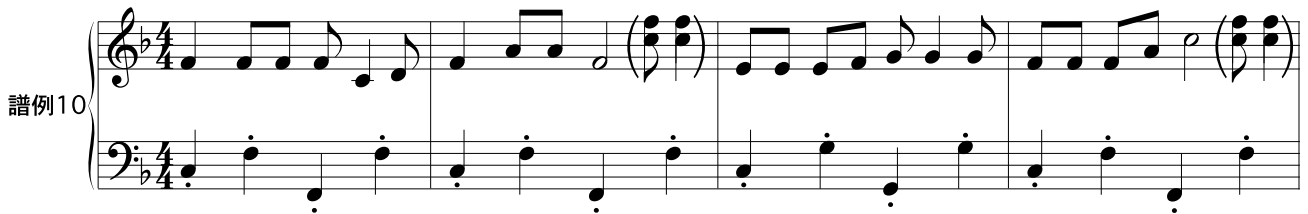
そして最後に、もう1冊『ないしょ ないしょ』を学生と筆者でやることになっていたのであるが、司会の学生が「これでおしまいです」と言った。驚きのあまり何も言うことが出来なかった。確かに子どもの「疲れちゃった」「終わったの?」という声も聞こえていたので、司会の学生の判断で打ち切りになってしまったと二人とも思ったのであったが、実際には、単なる打ち合わせ不足で、司会の学生は3冊で終わりだと思っていたのである。この作品は学生の自信作であったので、出来なかった失望は大きかったが、それが次の年の発表へとつながった。

### III 発表作品の内容とその実践 その2

平成18年7月15日(土)14時より「絵本と音楽をたのしもう!」と題して、第2回目の発表を行った。今回も前回と同様に幼児教育の学生が、宣伝を行ってくれたのであるが、当日は三連休の初日だったためか、子どもは10人足らずしか集まらなかった。前回のような子どもからの反応が少なく、会として盛り上がりには欠けたものの、じっくりと見てもらえたようである。

#### 1 『ぶきや ぶきや ぶう』

この絵本は、学生自身が選んだものである。「ぶきや ぶきや ぶー ブタおじさんのバスは はしります」と髭の生えている豚が帽子をかぶって緑のボンネットバスを走らせている場面から始まる。色使いがフォーブ的で模様のあるピンク色の空に黄色の雲が浮かんでいる。古くて整備が悪いのか色々な所から煙を吐いている。このバスが順々に色々なお客さんを乗せては降ろしながら遊園地まで走っていくお話である。バスが走っている間は、テーマメロディー(譜例10)が繰り返し演奏され、バスが停留所で止まってお客を乗せる時には演奏しない。テーマメロディーは乗ってきたお客の感じに合わせて音高や速度、弾き方に変化が付けられた。「『のりますよ』『のりますよ』 ダルマが のってきました」の部分では、低音でゆっくりなテンポで重く演奏され、お寿司のかっぱ巻きが乗ってくると、高音で軽く演奏された。途中、雪が降ってきたり池に入っていくため、達磨やかっぱ巻きは、降りる時には雪だるまや河童になった。そこでは、《ゆき》やかっぱ寿司のメロディーが演奏された。途中、雪が降ってくる場面では、C音D音によるトレモロが効果音として用いられた。



## 2 『まわる まわる』

三人の学生によって発表された。絵本の読み手、ピアノ演奏、演技者の役割分担で、演技が伴ったものはこれが初めてである。『まわる まわる』は、様々な回る様子が明解な絵と言葉で示されている。まず「まわる まわる ぶる ぶる まわる」という言葉と共にプロペラが付いた大きな飛行機が示される。全音音階の急速な繰り返し（譜例11）にのって、演技者は「シー」と言いながら低い体勢で翼のように両肘を広げてゆっくりと歩き廻り、最後にはピアノの音が上昇して消えるのに合わせて、体勢を次第に起こして立ち上がって手を高く挙げて、飛行機が遠くに飛んで行った感じを表現した。次は「まわる まわる しゃり しゃり まわる」でレコードの絵である。演技者の指揮に合わせてベートーヴェンの《交響曲第5番「運命」》の第1楽章の第1主題の部分が演奏された。「まわる まわる がちゃ がちゃ まわる」は回転寿司の絵である。かっぱ寿司のメロディー（譜例12）に合わせて演技者は「わーい、お寿司だ、お寿司だ、好きなお寿司は何ですか？」と近くの子どもにきき、「鮪だそうです！」と言った。扇風機で「まわる まわる びゅん びゅん まわる」の頁では、G、E、D、Cの急速なくり返しを高音から低音へ、また高音へと演奏される中で（譜例13）、「暑いな、今日みたいな暑い日は扇風機がなくっちゃ、でもクーラーが効いていて気持ちいいな、ここは」と暑そうな様子を表現しながら言った。「まわる まわる から から まわる」で、男の子がトイレに座ってトイレットペーパーを取ろうとしている絵では、Es音とF音のトレモロに伴って「うーん、ぶりっ、今日もいうんちが出ました」と言った。「まわる まわる くる くる まわる」では、中国風曲芸師が両手と鼻で皿を回している絵である。C-durの4ビートの和音から始まり（譜例14）次第に半音階ずつ上がってテンポも速くなる音楽にのって、「おっ、とっ、とっ、と、いっぱい回っている、危ない、危ない……」と言って、曲芸師を演じた。次の頁では、まず「まわる まわる ちか ちか まわる」と読み手が言った後、《おおきな古時計》が演奏され、その後演技者は「もうすぐおやつの時間かなあ、まだかなあ、おなかがちよっとすいてきたみたいだ」と言った。音楽と言葉が重なっておらず、落ち着いた感じが出ていた。「まわる まわる ぶん ぶん まわる」で野球選手がバットを勢い良く回すシーンでは、野球の音楽（譜例15）に合わせて「さあ、ピッチャー投げました。イチロー、おっと、打ちました。カキーン（プシー）入るか、入るか。ホームラン！」と言いながら、その様子を演じた。「まわる まわる ごーごー まわる」は、絵本の見開きを縦長に使い、トラックや木や牛までが巻き込まれている竜巻きの絵である。低音のトレモロから徐々に音高を上げて行く中で「きゃー、助けて、助けてー」と口を押さえて言い、強風のため声もはっきり聞こえない様子が表されていた。蚊取り線香の絵に「まわる まわる もくもく まわる」では、「うー」と蚊が鳴いている空間を作り、暫くして、パチンと手を叩いた。その後、後奏のような緩やかなメロディー（譜例16）が流れた。音楽の無い空間が効果的に用いられていた。ジェットコースターの絵に「まわる まわる きゃー きゃーまわる」では、下行、上行グリッサンドの連続が演奏される中「やっ、ジェットコースター、怖い、きゃー」と怖がっている感じを表現した。その結果、男の子の目が回っている「ぼくのめまわる まわる きよ

ろきよろまわる」という最終頁へ続き、《小さな世界》のメロディーに乗せて、演技者も目の回った様子を表現し、「世界も回る おしまい」で締めくくられた。

飛行機  
譜例11

かっぱ寿司  
譜例12

扇風機  
譜例13

曲芸師  
譜例14

譜例15

譜例16

### 3 『もこもこもこ』

青色から水色、薄水色へのグラデーションが上から下へ画面の6/7位の位置まで続いている。画用紙に色鉛筆で塗ったような色合いである。一番下、つまり残りの1/7の部分は、青紫色で大地の地平線のように、ここは絵の具のべた塗りの感じである。それが見開きに描かれていて、言葉は「シーン」のみ。見開きに描かれた画面の構図、つまり6/7と1/7に上下に区切られて、まるで空と大地のような構図は最終頁まで続く。次の頁をめくると前頁の水色部分の地の下から黄緑色が顔を覗かせ、下に行くほど黄緑色が主張するようになる。黄緑色の上から青を重ねたようで、前頁より明るい感じがする。大地の色は前頁と同じであるが、小さな突起ができていて「もこ」と記されている。次の頁は緑から黄緑へのグラデーションである。大地の突起が前頁よりも大きくなって上部に向かってオレ

レンジ色になっている。その少し離れた場所に「によき」とマッシュルームのような形の小さな小さな突起が出現した。このように、この絵本は色と形と擬態語で描かれている。

最初の「しーん」とした場面にドビュッシーの《前奏曲集 第1巻》より第10曲〈沈める寺〉の出だしが演奏された。この曲には、Profondement calme（深い静けさのうちに）という発想標語が示されてある通り、静けさに始まり、静けさに終わる。途中には展開があって盛り上がりがある。この絵本も同様の流れになっているため、〈沈める寺〉のメロディーや雰囲気が所々に用いられた演奏を考えたようである。「もこ」の突起は「もこもこ」「もこもこもこ」と大きさが増し、色は青紫からオレンジ色に変化していく。その擬態語に合わせてピアノが3度音程の上行形で「もこ」を表し、「もこもこ」は、前者を2回弾き、「もこもこもこ」は「もこ」の3度音程を弾いた後、4度、5度と音程の幅を広げた音形を弾いた（譜例17）。「によき」は半音進行の3音、「によきによき」は前者の音形の後に3度上の音が加わった音形をオーボエが演奏した（譜例18）。このようにピアノとオーボエが掛け合いながら様子を音で表現していった。紫色の画面にクラゲのようなものが「ふんわ ふんわ」と浮いている場面では、前頁のグリッサンド演奏から続いて盛り上がって〈沈める寺〉のサビのメロディーがピアノとオーボエで演奏された。

譜例17

もこ                      もこもこ                      もこもこもこ                      rit.

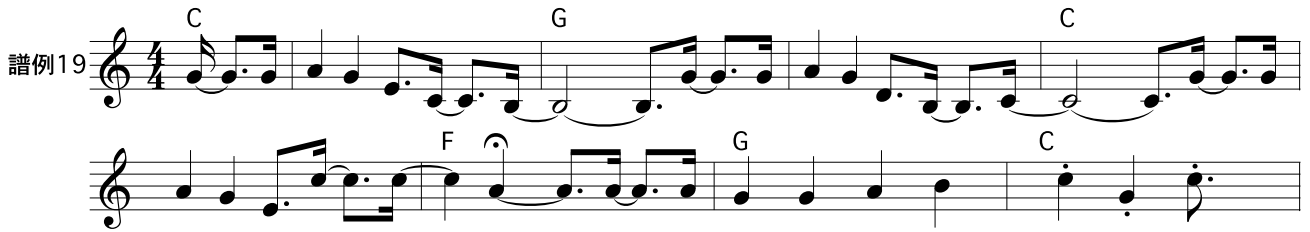
譜例18

によき                      によきによき

#### 4 『ないしょ ないしょ』

昨年、発表できなかった作品である。栗鼠が「くまくん ちょっと みみ かして」「ふくろうのおじいさんには ないしょだよ」と言って何かを聞こえないように、こしょこしょ話す所から始まる。次は熊が兎に「うさぎくん ちょっと みみ かして」「ふくろうのおじいさんには ないしょだよ」ともそもそ何か伝えている。その後、兎から、鼠、恐竜と「ないしょ」が伝わって、森中に広がる。夜、梟のおじいさんが目を覚ました時にみんなは声を揃えて「お誕生日おめでとう」を言うお話である。最初の栗鼠から恐竜までの部分は、《ハッピーバースデー》のメロディーをアレンジしたメロディー（譜例19）を、動物の感じに合わせて音高や、速度、軽重を変化させて演奏した。夜、梟のおじいさんが目を覚ます場面では、音楽を入れないことが効果的で、その後クライマックスに向かって半音ずつ音を上げて《ハッピーバースデー》の最後のフレーズが高らかに演奏されて「お誕生日おめでとう」で締めくくられた。





## IV 考察と授業における今後の課題

当初、学生の希望から始めた絵本に音楽を付ける活動は、絵本に描かれている内容に対して何らかのイメージを持ち、それを音や音楽で表すことであった。このイメージを音にする活動は、レベルの差はあるものの、小学校音楽科教育の中の音楽づくりでも行われている内容である。従って、小学校教諭の免許を取得しようとしている学生自身に取り組んでおくことは重要であり、必要不可欠な学習内容であると考えたので、今後も続けて行きたい。そこで今回の発表事例から、音楽付けの方法について明らかになったことや、今後続けて行く上での授業における課題をまとめてみる。

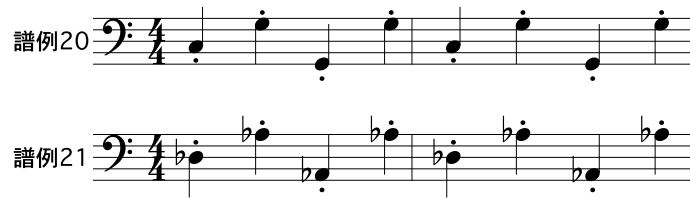
改めて2回の発表作品を眺めてみると、学生が探してきた絵本も含めて、どれも繰り返しとその変化を楽しむことが一要素として含まれていた。そのような絵本に音楽を付ける方法として、今回の事例から次の二つの方法が示されたといえよう。

- (1) テーマとなる一つのメロディーを作り、そのメロディーを絵本の登場物のイメージに合わせて変化させる。
- (2) 絵本の登場物や場面をイメージさせるような音楽や音を演奏する。

まず、(1)の方法について『ぶきゃぶきゃぶう』と『ないしょないしょ』を例に考えてみたい。テーマとなるメロディーは、『ぶきゃぶきゃぶう』では創作されたものであり、『ないしょないしょ』では《ハッピーバースデー》のメロディーをアレンジしたものであった。ゼロからのメロディー創作が難しい場合は、物語の内容に何らかの関連がある音楽を探してアレンジする方法が有効であるかもしれない。次にそのメロディーを物語の登場物のイメージに合わせて変化させる方法は、動物ではその大きさに合わせて音量や音の高低に、歩き方等の特徴に合わせて速度や音の軽重に着目して変化が付けられていた。初等音楽科教育では、特に低学年で音の強弱や高低、テンポの速い・遅い、スタッカートやレガートといった音楽の諸要素を動物のイメージと結び付けて捉えさせることが多い。この内容は「初等音楽科教育学」の授業の中で様々な形で取り上げていることもあり、それらを基にして学生自ら工夫できていたのではないかと考えられる。

作品発表に際しては、予め授業中に練習発表をしてから、子ども図書室での本番に臨んでいたのだが、『ぶきゃぶきゃぶう』に限っては、練習発表が本番当日になってしまった。つまり何のアドバイスも出来なかったのである。今回の発表では、テーマメロディーが演奏される前後に、つながり的なメロディーが毎回演奏された(譜例20)。ところが狸がバスに乗ってくる時はそれを半音上げて演奏された(譜例21)。これは、半音上げることにより音楽の雰囲気が変わるので、狸の感じを出すために移調したと考えられる。移調することにより音楽の雰囲気が変化することは学習済みであり、歌の伴奏時に必要となるため多少は練習してきたが、使いこなすにはある程度の訓練が必要である。学生の演奏は、狸のイメージに合わせて前奏は移調したのであるが、その次のテーマメロディーはこ

れまでと同じであった。移調に精通していれば、テーマメロディーも移調して Des-dur で演奏したのではないかと考えられる。今後は授業において、音楽付けにも歌の伴奏にも役立つように、短いメロディーの移調の練習を取り入れていく必要があると考えた。



(2) の「絵本の登場物や場面をイメージさせるような音楽や音を演奏する」ことについては、『なんでしょ なんでしょ』と『まわる まわる』を例に考えてみる。両方とも物語の登場物の特徴やその様子を音で表現し、関連のある曲がアレンジされ用いられていた。特徴や様子を表す方法としては、『なんでしょ なんでしょ』では短い簡単なメロディーで音色を工夫していたが、それらは譜例に示されている通り、CメジャーとGメジャーのコード内でのメロディーであり、それら二つのコード内だけでもある程度の音楽付けができることが明らかになった。今後はCメジャーとGメジャーのコードの範囲で即興的に短いメロディーを作っていく活動も取り入れたい。『まわる まわる』では、グリッサンドや半音階進行やトレモロなどが多用されていた。それらは回る特徴を示す効果音として、絵本の中で効果的に用いられていた。調性的な音楽ではなく、音を自由に使いこなして作る感覚的な音は、絵本には大事な要素である。そのような音づくりは、技術的に難しかったり個人の感覚的なものが大きく作用するが、小学校の教師を目指す学生に身につけさせたい範囲で指導できる部分は何であるかを考えて行きたい。絵本の内容に関連のある曲のアレンジでは、『ぞうさん』や『大きな古時計』、かっぱ寿司の音楽など、子ども達の馴染み深い曲が、たくさん用いられていた。クラシックの楽曲やコマーシャルソング等も対象に合わせて様々なアレンジして用いていけることが示された。また、演技が伴ったものは初めての試みであり、今後の課題となりそうである。

以上の考察によりここでもう一度、授業における今後の課題をまとめておきたい。

1. 短いメロディーの移調の練習を取り入れる。
2. CメジャーとGメジャーのコードの範囲で即興的に短いメロディーを作っていく活動を取り入れる。
3. 調性感を離れて、音を自由に使いこなすための指導法を考える。
4. 演技の取り入れ方について。

## V 音・形・色・動きの関わりとイメージ

これまでは、具体的な物を対象としたイメージによる音楽付けであったが、最後に、色と形と擬態語で描かれている『もこもこもこ』の事例から考えてみたい。内容が色や形と、擬態語から感じとれる「動き」といったもので、音楽を付けるにあたっては一番抽象度が高いものであった。今回この絵本と学生の音楽を聴いて、音・形・色・動きは密接に関わり、その関わりに対するイメージは、

普遍的なものもあれば個人的なものもあることを改めて感じた。突起物の「もこ」という形や動きに対して3度の上行形の音形が用いられたが、ここで下行形の音形をイメージする人は少ないのではないだろうか。また、「もこもこ」と大きくなるのと同時にクレッシェンドし、「もこもこもこ」と更に大きくなり色も明るくなるのにあわせて、ピアノは音程の幅を広げると同時にクレッシェンドの幅も大きくなり尚かつ、リタルダンドして余韻を増していく演奏をした。これは音・形・色・動きのイメージつまり聴覚、視覚、動きのイメージが全て一致していた。一方、紫色の画面にクラゲのようなものが「ふんわふんわ」と浮いている場面で〈沈める寺〉のサビのメロディーが演奏されたが、このメロディーが絵本の中でどの場面にふさわしいか、イメージに合致するかといったことは、極めて個人的であろう。つまり自分のイメージと合致するものもあれば、そうでないものもあり、このような絵本は、教員志望の大学生にとって音楽を付けることだけでなく、それを鑑賞することにも大きな意味があると考えられる。絵本を見ながら他者の音楽のイメージを感じつつ、自分の音に対するイメージを膨らませ、また新たな音楽付けができるのではなかろうか。音楽活動は表現においても鑑賞においても様々なイメージが関わっており、今後もこのような絵本と音楽を通してその関わりを考えていきたい。

## 発表者一覧

### 『がたんごとん』

ギター：渡邊克吉（発達教育3年）

歌：阿部美樹、岩井暁子、大平佳世子、岸山綾乃（幼児教育3年）

### 『なんでしょ なんでしょ』

ピアノ：渡邊咲（音楽教育3年）

### 『ぼくのおじいちゃんのかお』

ピアノ：大成由奈（障害児教育5年） 語り：中村美季子（障害児教育5年）

### 『ぶきやぶきやぶー』

ピアノ：佐野由実、武藤飛鳥（障害児教育3年）

語り：岡久美子（社会科教育3年）

### 『まわるまわる』

ピアノ：雨宮雄貴（音楽教育3年） 語り：武井志織（音楽教育3年）

演技：亀田裕康（音楽教育3年）

### 『もこもこもこ』

ピアノ：亀田裕康（音楽教育3年） オーボエ：武井志織（音楽教育3年）

語り：橋本紗希恵（音楽教育3年）

### 『ないしょ ないしょ』

ピアノ：渡邊咲（音楽教育4年） 語り：平野宏絵（音楽教育4年）

## 謝辞

今回の発表に際して、より良くなるよう試行錯誤して発表してくれた学生の皆さん、事前の宣伝や当日の裏方として多くの準備に携わってくれた子ども図書室のスタッフの皆さんや幼児教育の学生さん、そして企画運営等で全体をまとめて下さった図書館情報サービスグループの水上佳子さんに感謝致します。

## 参考文献

- [1] 天野祐吉 文, 沼田早苗 写真, 『ぼくのおじいちゃんのかお』, 福音館書店, 1986年.
- [2] 安西水丸, 『がたんごとん』, 福音館書店.
- [3] 内田麟太郎 文, 竹内通雅 絵, 『ぶきやぶきやぶー』, 講談社, 2001年.
- [4] かさいまり, 『ないしょ ないしょ』, アリス館, 2004年.
- [5] 繁下和雄編, 「絵本をうたう」, 『月刊 音楽広場』, 1996年2月号とじこみ研究特集.
- [6] 高島純, 『なんでしょ なんでしょ』, アリス館, 2004年.
- [7] 谷川俊太郎 作 元永定正 絵, 『もこもこもこ』, 文研出版.
- [8] みやにしたつや, 『まわる まわる』, 鈴木出版, 2000年.